

ゴルギアース篇における「弁論術」論の帰趨

霞 信三郎

一、緒 論

プラトーン (Platon, 427—348B.C.) の「ゴルギアース (Gorgias, 前五世紀の弁論家) 篇」は、ソークラテース (Sokratēs, 469—399B.C.) を中心に、ゴルギアース、ポロス (Polos, ゴルギアースの弟子、同時代の人)、カルリクレース (Kalliklēs, ゴルギアースの弟子、同時代の人) 等によって、「弁論術」 (ῥητορικὴ ἡ ρητορικὴ) について論ぜられているものであることは周知のところであらう。

さて、紀元前五世紀、アテーナイ (Athenai) において、ペリクレス (Periklēs) がデーマゴゴス (dēmagōgos = 民衆の指導者) として出現し、アルコン (archon = 統領) の地位について (461B.C.) 以来、平等を原理に、自由をその条件としているような民衆第一主義の民衆主義 (δημοκρατία) 時代に入る。

このペリクレス時代 (461—429B.C.) 以後、アテーナイの崩壊する前四世紀にかけて、市民をして社会において優越ならしめるものは何であったか、——それは家柄でも財産でもなく、まず知識においてすぐれていることであつた。とくに、当時、総てが言論によって決定せられようとしていた民衆主義社会において、時流に投じ、政界に重き

をなさんとすれば、それは必然に、卓抜な知識と、それに基づく斬新、唐突、実理性に富み、理非はともかく、美しく洗練された言葉によって、大向こうを喝采させるような弁論の術を心得ていることであつた。とくに相手を圧倒的にい、い、くる、める、こと、の出来る弁論術を巧みに操ることの出来る「弁論の雄」(deinos legein, Prōtagoras 312d) になることであつた。——かくして、ペリクレス出現以後、アテーナイにおいて「弁論術」は、政界に特権的地位をえんとする人々のための新時代の武器と化し、人々、とくに家柄のよい富裕な青年たちは、進んでこれを学ばんことを求めた。しかして、この術を心得ている人たちは、ソピステース (Sophistes = 智者) といわれ、有能にして育ち、富にめぐまれた青年たちから、尊敬と圧倒的な拍手をもって迎えられたのであつた (Protag. 315, Theaetetus, 101C, etc.)。

ところで、ソピスト達といわれる人々の中で、その始祖といわれる地位にある人は、プロータゴラス (Protagoras, ペリクレス時代の人) であらうが、我々は、いま、一群のソピスト達の中の一人で、プロータゴラスに次ぐソピステース^{II}ゴルギアースの弁論術が、ゴルギアース篇の中で、いかなるものとしてとらえられ、又この篇の中で、彼の弟子であるポーロスとカリクレーヌスが、紙数及び内容の上でゴルギアースよりも圧倒的に多く、又重大なことをのべているが、この二人の弁論家 (p̄tropa = rhetora) の弁論術はいかなるものであり、いかなるべきものであるか、——総じて弁論術の基底にあるものは何か、又その帰趨はどこであらうか、——メスを入れてみたいと思う。

ゴルギアース篇は「ゴルギアース」という名称がつけられているにもかかわらず、この対話篇において、ゴルギアースの出でくる場面は一部分にすぎない。むしろ、ゴルギアースの弁論術論は、——まず、彼の崇拜者で、彼をたえず先生として取り扱い、^(四四八A) 彼がソークラテースとの問答において、窮地に押し込まれているのを、代つて、そして、進んで答えようとする、忠勤な弟子ポーロスによって進展、強化され、更に、同じくゴルギアースの弟子であり、ポーロスよりも年長の、ポーロスより各段と強引で徹底した論陣を張るカリクレーヌによって、ポーロスによって強調さ

れたことが徹底化されていく。(＊以下、この数字は、「ゴルギアース篇」の頁を示す。)

二、本 論

ゴルギアースは、自から、その心得ている技術を「弁論術」^(四四九A)だといい、自からを「すぐれた」(agathon) 弁論家と呼んで貰いたい^(四四九A)という。しかも彼は「このことはここだけでなく、よそでも公言している」^(四四九B)ことだといって、自からすぐれた弁論家であることを自満させる^(四四九A)。

ところで、彼のすぐれた弁論家であるとは、いかなるいみのものか。——彼によれば、「弁論術に巧みなもので、他のだれでも弁論家になることが出来る」^(四四九C-D)ものである。しかもその弁論術は何をめざしているかといえば、「総てのその活動と達成」^(四四九C)(hē praxis kai hē kurosis)とを全く言論によって^(四五〇B)(dia logon)なす」こと、つまり、総てを言論によって成しとげ、達成するものであり、^(四五一D)それがこの術のめざすものであるとする。

さて、しからば、弁論術とは、どんな仕方、総ての活動と仕上げとを言論によって遂行完成するというのであるうか。まず彼において、弁論術が、その言論によって取り扱っている事柄は「人間の事柄の中で最大なもの」^(四五一D)(ta megista tōn anthrōpein pragmatōn)であり、しかも最善のもの^(四五一D)(kai arista)である。即ち、彼によれば、弁論術は医術^(四五二C)(τῆ ἰατρικῆ) = hē iatrikē や体操術^(四五二C)(τῆ γυμναστικῆ) = hē gymnastikē)と異って、医術や体操術の「全部の活動と達成とを言論によってやっつてのける」^(四五二C)、つまり仕上げの術であるとする。そして、それ故に、彼において、弁論術の關係するものは、人間的な事柄の中で最大なものであり、しかも最善なものなのである。しかも彼は、弁論術が、人間にとって「最大の善」^(四五二D)(megiston agathon)である所以のものは何かを問題にし、それは人々が自分自身が自

由 (celeuteria) でいられるばかりでなく、各人が自分の国家において他人を支配することの原因 (aition)^(四五二D) となるものだからである、とする。つまり、彼は、弁論術を身につけているものは、何人にも拘束を受けないものであると同時に、他人を支配することの出来る政治の技術を身につけているものであり、そのいみで弁論術を身につけている人は自由人であり、社会において、即ち、政治社会において優越者であるというのである。

実際、ゴルギアースは、「とにかくこの力 (弁論術) をもっていれば、君は医者 (iatrion) 奴隷とし、体操の先生を (ton paidotriben) 奴隷とすることが出来るだろうし、法廷では裁判官達を (en dikastēriōi dikastas) 、評議会では評議員たちを (en bouleuteriōi bouleutas) 、そして国民議会では議員たちを (en ekklesiāi ekklesiastas) また、公けのことについて開かれるかもしれないどんな他の会合においても、一中略一話をし、説得出来る (legein kai peithein)^(四五二B)」ものであるとする。つまり、彼は弁論術を心得ている人は、一般的にはあらゆる専門家に優越して、それらの専門家を奴隷化し、政治社会においては、あらゆる人々を支配出来る統治者たることが出来るというのである。

ところで、なぜ、弁論術は、以上のような人々を奴隷にしたり、また、それを心得ている人が政治社会において優越者 (統治者) になることが出来るであろうか。——彼はこのことに關して、その理由を弁論術の仕事の総てと仕上げの極点を説得 (ἡ περὶ τοῦ ἑαυτοῦ παρθένου) にしぼって、弁論術は「説得の職人 (専門とするもの、peithous demourgos) 」^(四五三A)、その仕事の総ての極点はここにある」とのべている。即ち、彼によれば、弁論術とは、例えば医者の説得出来ない患者を説得して、くすりをのみ、手術をし、灼くことをさせるような、そのような説得の技術が、弁論術の弁論術たる所以であり、「実際のことの真相を知る必要はないが、知らないものに対して知っている者よりも、よりよく知っているように見せる、何か説得のからくりをみつつけること」^(四五九C)の出来るものとして、まさに、弁論術とは口先のからくり

にかかわるもの、即ち、真実をしるを要しないものであるとすべて、弁論術とはいかなるものであるかの正体を暴露する。——かくして、それ故に、彼はまた、世に弁論家といわれるものは、「大衆の面前で (en plethrei)」、他のいかなる専門家 (démourgon) よりも、より雄弁に話すことが出来るもの」でなければならぬとも発言する。^(四五六C)

ところで、彼において、大衆の前では「無知なもの (en tois me eidousin)」をいみする。——しからば、彼において問題になることは、真実や真理ではない。しかもなお、彼は、「弁論術は正不正に関する教えではなく、信ぜさせるための説得の職人^(四五五A) (＝専門家) である」ともいう。即ち「弁論家の仕事は裁判所やその他の国民議会 (＝裁判官やその他の国民) に、正しいことや不正なことについて教えることではなくて、ただ信じさせるだけの (peistikos monon) ものである」という。^(四五五A)

かくては、弁論術の本質は、真理、真実を探究することではなく、いや、そのみか、善悪正邪の区別をして正義を確立し、道義的態度を押し進めようとするものではない。しかして、この基底にあるものは何か、——このことを吟味探究すれば、それはこの世界に真理、真実はない、そのみか善も正もない、ということになる。そして、このことを換言すれば、人間の生き方は主観のままに人々を、てんにかけ、いいくるめ、その場その場をこまかしてゆければよいという主張になるものであって、この説得の弁論術は陥穽の詭弁術になりかねないのである。

しかも彼は、このような弁論術を「大変便利なもの (polle rhaistone)^(四五九C)」だと称讃している。しかし彼は弁論術を以上のようなみで、大変便利なものであるといいながら、なお、それは不正に用いてはならぬもの、即ち「正当に (dikaios) 用いねばならない」ということによつて、例え、弁論家は総ての人を相手にして、あらゆる事柄についてより雄弁に話すことが出来るとしても、——例えば、医学の専門家である「医者から信望を (ten doxan) 奪って^(四五七B) もいけなしいし、他の専門家から (tous allous demourgous) 奪って^(四五七B) もいけなしい」とのべて、——彼の主張を徹底さ

せずに、ここにわずかに道徳的立場を保持している。

しかし、また彼は、「弁論術は不正に (adikos) 用いてはならないけれども、弁論家はその弁論術を不正に用いることが出来る (ho rhetor tēi rhetorikēi kan adikos xroito)」との言、彼のい、わゆる弁論家であり、弁論術を重んずる態度を露出する。

ところで、ゴルギアースのこの発言は極めて重大な発言である。というのは、もしもこの弁論術の不正使用の可能性を認めるならば、それは、とりもなおさず、不徹底ながら、彼によって、わずかに保持されている道徳的立場を崩壊させ、完全に、弁論術を陥穽的詭弁術にするのみならず、彼をして陥穽的詭弁家に墮落させてしまうからである。

それにもまして、ゴルギアースと対話 (dialogos) していたソクラテースにとって、この発言は聞き捨てならぬものであった。しからば、「正しいものは、決して不正を行おうと欲しない」^(四六〇C)ものであり、「正しいものは、正しいことを行おうと欲する」^(四六〇C)ものであり、また弁論家は「どんなことが正しいことか、不正なことか知っていなければならぬ」^(四六〇A)という立場に立つソクラテースは、ゴルギアースに対して激しい問答的駁論を展開する。この駁論の前に、ゴルギアースは、ソクラテースの「弁論家が弁論術を不正に用いたり、不正をすることに応ずることは、不可能である」^(四六一A)、弁論家は不正を正すもので、正しいとはいかなるものであるかをよく心得ているものである、^(五〇八C)という意見に一致させられる——という矛盾に逢着する。

さて、果して、この矛盾した意見の一致に逢着して、ゴルギアースの弁論術は、説得のそれであることを払底して一切の陥穽や詭弁を斥け、正しいことのためにのみ用いられる弁論術にその帰趨を求めたことになるであろうか。また、それがゴルギアースの弁論術論のいきつくところであろうか。

以上のことに對して、弟子のポロス^(四六二A)は、ゴルギアース先生のこのソクラテースとの意見の一致は、ソクラテ

1 スの強引な、惡趣味 (agroikia) な誘導によるものであり、^(四六一C) 激しい問答法 (dialektike) の前に、恥かしくなった (aischunē) からであり、^(五〇八C) 真意はそこにないと、ソークラテースにきめつける。

ところで、このようなポーロスの発言に対して、ゴルギアースは一言の発言もしていない。しかれば、ゴルギアースの真意は、弁論術は真理、真実を探究し、また、正・善の本質を探つて、正義を確立することを目的とするものではなくて、むしろ、専ら説得を目的とし、時にそれが不正に用いられてもやむをえないという考えを保持しているのではなからうか、いな、かく理解することはゆきすぎであらうか。

さて、それにしても、ゴルギアースの弁論術は、その弟子ポーロスに至れば、①まず、「弁論家は諸国において最大の力を有っているもの (megiston dunantai en tais poleis)」である。^(四六六B) というのは、「彼らは僭主たち (hōi turanoi) のように、誰でも殺したいと思うものを殺したり、財産 (chrēmata) を没収したり、彼らに適當と思われるものを国家から追放したりする (ekballousin ek tōn poleōn)」^(四六六C) ことが出来るからであると主張し、弁論家の使用している弁論術は、僭主、即ち「国家において、国民を殺したり、追放したり、自分の考えで何でもすること」^(四六九C) の出来る人のように、その「独裁的な権力 (dunamis kai turannis)」^(四六九D) を振り廻わすことが出来るものであり、恣意のままに駆使できる主観的な、そして言葉によって、生殺与奪の権を握る有力な弁論の技術であるとのべる。彼が、かくのべることによって、ゴルギアースの妥協的な説得をこととする弁論術論は、遙かにオーバーされ、独裁的な、くなく、強権をふるえる僭主的弁論術論に強化される。②つぎに、彼は、弁論家であれ、僭主であれ、「すべて行為する人は善のために」^(四六八B) するのであり、「もしも誰か殺したり、追放したり、財産を没収したりする場合には、このことをするのとが、しないことよりも、われわれにより善いことだと思ふからする」^(四六八B) のである。即ち、それは、自分の欲していることをなしている^(四六八D) のであり、「適當だと思つてした行為が、それをするることによって、有益なもの (to ophelimos)

を伴う場合には善で」ある、そしてそのときこそ、その行為は「偉大な力を持っているもの」(to mega dunasthai)であるとして、——弁論家といわれ、僭主といわれる人は、自分に有益な結果がともなう行為を善とし、そのような行為を有力であるとする、というのである。

しからば、ポロスによって善とか偉大な力をもっているとかいわれるものは、自分本位の利益を中心としたものであって、利益が行為の基準であり、彼のいみする善とか有力(偉大な力をもっていること)とかは、道徳的な意味を喪失してしまっているものである。かくして、彼における弁論家、そして弁論術の意図するものは、正・善を探究して正義を確立することではなくて、ただ利益をもたらしものを追求することである。それはまさに、利益をもたらしものだけが正であり、善であるからである。さらに、この態度はポロスをして、「多くの悪いことをしたものが(polloi adikountes anthropoi) 幸福に(eudaimones) なっていることをしめしてくれる」人物があるといわせ、

その例として、マケドニア(Makedonia)の僭主となるために、自分の伯父(Alketas)や、従兄弟(Alexandros)や、異腹の弟を殺すことによって、マケドニアを支配するに至っているアルケラオース(Alchelaos)をあげさせる。

かくしてポロスにおいて「アルケラオースは悪いことをした人と考えられるのに、しかも幸福」であり、「悪いことをしたり、悪いことをする人間が幸福」である例証であるとし、——総じて「悪いことをするものが(ho adikōn)

罰(dike)を受けなければ——中略「幸福」であり、「悪いことをすることは、悪いことをされるより悪く、そして罰を受けないことは、それを受けるよりも悪いと考えない」とのべ、なおさらに、悪いことをするよりも悪いことをされる方を受け容れない、「少くとも、わたしには悪いことをされる方が悪い」と思うといい、「最大の悪事をしながら

何ら刑罰に処せられないのは、幸福なもの」であり、「悪事をするものは悪事をされるものよりも、罰せられないものは罰せられたものよりも幸福なものである」とする。——ところで、罰(dike=裁判=正義)とは「放縦(akolasias—

懲罰されない状態」や不正 (adikia) から救助する」ものであり、「罰を科することは、最大の悪、即ち邪悪からの救出」(to dikēn didonai megistou kakou apallagē en.) をいみするものである。

さて、ときに、ポロースと対話しているソークラテースは、以上のことに関連して、「不正や放縦や、一般に魂の悪は、この世の中で最大の悪」であり、刑罰はこれらの諸悪から救助、救出させるものであり、「もしも自分、または自分が世話している誰か他の人が、悪い事の罪を犯したとすれば、出来るだけ早く罰をつぐなうことの出来るところ即ち、丁度医者のところへいくように、裁判官のところへ、自分の意志で出頭しなければならない。不正の病が悪性になって、魂の根深い不治の潰瘍をひきおこさないように、速急な心でしなければならぬ」とのべて、手おくれにならないうちに、諸悪から救助、救出するために罰を受けるべきであることを勧奨し、この間にあって、弁論術は自分自身であれ、両親、友人、子供、あるいは祖国であれ、「その犯した不正の味方をして (Gaupēr tēs adikias) 弁論する」ものであってはならず、「それぞれの場合において、たまたま不正をするものがあつたならば、訴えねばならぬというものであり、また不正を隠すべきではなく、むしろ罰を受けて、そして健全になるように明るみに出さねばならないというものであり」(四八〇C)、「自分自身が、自分のや身うちものの第一の告訴人となって、そして不正が明らかになり、最大の悪、即ち不正から救われるように、この目的に弁論術を使用しなければならぬ」といふ(四八〇D)ものである、という。——これに対して、ポロースは、以上のことは「とてつもないことだ、ソークラテースさん (Atropa men, ô Sôkrates,)」と云って、ソークラテースの見解を否定する。

まさに、ポロースのこの態度は、弁論術というものは、悪事や犯した不正に対して弁護するものであり、悪事や不正が罰を受けて明るみに出ないように隠蔽する役割をなし、むしろ悪事や不正から解放されないようにすること、不健全が温存されるようにすることが、弁論術の弁論術たる所以のものであるといっているように思われる。

かくして、ポーロスにおける弁論術は、(一)僭主的なものとして、独裁的な権力を主観的に思いのままに駆使することの出来る有力なもの、即ち言葉によって生殺与奪の権力を握る有力な弁論の技術であり、(二)つぎに、それは正、不正、善、悪に関係なく、自己の利益、とくに強力なものの利益を中心に弁ぜらるべきものであり、(三)さらに、それは悪事や不正の味方をして弁護すべきもの、つまり、悪事や不正が明らかにならないように、悪事、不正隠蔽の役割を果たすべきもの、即ち悪事、不正はしても、されまい、悪事をし、不正は犯しても罰せられないようにするものであった。――しからば、ポーロスによって主張されている弁論術の正体は、ゴルギアースの「弁論術は不正に使用してはならない」という道德的粹を破って、道德とか道義などはどうでもよく、それは惡逆無道の僭主の幸福を実現し、強者の利益を中心に、悪事、不正をしても、それが暴露されないように、弁護し、隠蔽するといった、悪い目的に用いられても一向に差支えないという、権力的な非道義、非道德的な有力な武器であるということになる。

勿論、といつても、以上の論に達するまでの間に、ソークラテースによって、「ポーロスのいつているような弁論家や僭主は『最も力のないもの』^{(四六六D)^上}無力(dunasthai smikrotaton)』である、何故かといえば、それは彼らが理性によつて行動していかないからである。実に『力は善』^(四六七A)であり(dunamis estin agathon)、『理性なしに(anen nou)自分の思うことをやることは、悪(kakon)である』^(四六七A)、つまり、弁論家、僭主たちは主観的、感性的に言辞を弄し、真理や真実を判断出来る理性にもついて行動をしていない。しからば、それは悪であり――力は善であるから、――無力である」と否定され、しかも、これに同意を求められ、ポーロスは同意を与えている^(四六七A)(Egege)。また、ポーロスは最初、悪いことをするよりはされる方が悪い^(四七四C)といいながら、ソークラテースの「悪いことをすることは、悪いことをされることよりもさらに悪い」^(四七五A)、あるいは「恥しい(caschion)」ことだという見解に同意するようになり、さらに彼は、「悪い事をしたにも拘らず、罰を受けずにいることは、最大の悪であり、あらゆる悪徳の中で、第一位に位す

るものだ、ということに同意している」。

しかし、結論的には、弁論術は僭主のようなものであって、独裁的な権力をもち、悪事・不正を犯しても罰せられることのないように弁護するものであり、その弁論によって、もし欲するならば、生殺与奪、国外追放も出来る有力なものであるという考えには変りはない。

というのは、ポロースと共に、ゴルギアースの弟子であるカルリクレースが「ポロースが以上のように同意したのは、あなたの議論の中に巻き込まれて、口を封ぜられてしまつて、思つていた通りのことをいうのが恥かしくなつてしまつたからだ」といつて、本当はあなたに同意してないのだと、ソークラテースに向つていい、それを側でポロースがきいていながら否定してない。

しからば、我々は、——ポロースの真意は、す、で、に、の、べ、た、結、論、に、あ、つ、た、の、で、あ、つ、て、途、中、の、同、意、は、一、応、ソークラテースの理論整然たる問答に自縄自縛され、思ひのたけをのべることが出来ず、同意したものであり、又それは、カルリクレースの言によつて、直ちに解消されるて、い、の、も、の、で、あ、つ、た——とみるべきである。

ところで、ゴルギアースにしても、ポロースにしても、ソークラテースに論駁されて、例え、不承不承に、一、部、分、で、あ、つ、て、全、面、的、で、は、な、い、に、せ、よ、ま、た、結、論、的、に、は、同、意、を、取、り、消、し、た、に、し、て、も、同、意、を、余、儀、な、く、さ、れ、て、い、る、様、子、を、そ、ば、で、き、い、て、い、た、カ、ル、リ、ク、レ、ー、ス、は、——最、強、の、弁、論、術、論、を、展、開、し、た、人、物、で、あ、つ、た、だ、け、に、——そ、の、師、ゴ、ル、ギ、ア、ー、ス、が、ソークラテースに同意したのは、同意したことによつて、彼が矛盾したことをいうように余儀なくされたまでであり、ポロースの同意も、真意とは違ふといい、また、「君が通俗な人気取りの演説」向きの事に引っぱり込んだから、^(四八二E)君は「俗受け演説家(demagogos)」であると、ソークラテースに向つて、吐き出すようにいうのである。

しからば、つぎに、カルリクレースの弁論術とはいかなるものであろうか。カルリクレースは、まず、弁論術を

非難しつづけてきたソークラテースの基礎理論である「哲学」(philosophia)を否定することから弁論術の性格を明らかにし、彼はそれによって、ゴルギアースからポロースへと強化されてきた弁論術論をさらに徹底化し、強化して展開した。(1)ところで、その一つとしてまず彼は、——ソークラテースの哲学は吟味論議をつくし、実務を調子よくやったり、名誉や他の多くの善いものを有とうとすることなどは眼中にはなく、例えば、正しいとはいかなることであるかを知れば、それを行い、不正を欲しないものである。しかしして悪いことをすることと、不正をしなから、罰を受けないことは、総ての悪の中の最大の悪であるとするものであり、もしたまたま不正があった場合には、進んで罰を受けて、最大の悪から解放されるようにするものである。また、そのようにしなければ止まないものである。つまり、それは道徳的な生き方を主張するものである、とする。

ところで、このような立場をとり、主張するソークラテースの哲学は、カルリクレースにとっては、地に足のついたものではなかった。何故かといえば、彼の弁論術にとって、欠くことの出来ないものは、哲学のやっているような本質的なものの「吟味論議をやめて、実務に堪能になるように勉強し、——中略——實際生活をし(bios)、名誉(doxa)や沢山の他の善いものを持っているところの人々を羨(四八六D)やむようになることであつた。しからば彼の弁論術においてなすべきことは、ソークラテースがやっているような、すべての事柄の本質に迫るために、徹底的な論議をつくし、ことに人間のことに關しては、その本質的な生き方を規制する普遍的な道徳を追求する哲学を排除すること、即ち、実務をよく処理し、實際生活に役立ち、名誉や他の多くの善いものをもたすところの、つまり、実利実益をうることに全力を傾注しない哲学を徹底的に排除することであつた。——かくして彼は、まず弁論術から哲学を否定し去るべきことを主張し、哲学を排除する。しからばまず、ここに彼の弁論術は、その非難するものを排斥し去ることによつて、強化されることになる。また、このことによつて、彼の弁論術論は強化されるのである。(2)つぎに、彼は、ソークラテースの基礎理論である「哲学」(philosophia)を否定することから弁論術の性格を明らかにし、彼はそれによって、ゴルギアースからポロースへと強化されてきた弁論術論をさらに徹底化し、強化して展開した。(1)ところで、その一つとしてまず彼は、——ソークラテースの哲学は吟味論議をつくし、実務を調子よくやったり、名誉や他の多くの善いものを有とうとすることなどは眼中にはなく、例えば、正しいとはいかなることであるかを知れば、それを行い、不正を欲しないものである。しかしして悪いことをすることと、不正をしなから、罰を受けないことは、総ての悪の中の最大の悪であるとするものであり、もしたまたま不正があった場合には、進んで罰を受けて、最大の悪から解放されるようにするものである。また、そのようにしなければ止まないものである。つまり、それは道徳的な生き方を主張するものである、とする。

クラテースの哲学は、つまり「法 (nomos) 成文法、慣習、約束等、人爲的なもの」(四八二E) を追求しているものであるから、排除しなければならないとして、哲学に法を排除することによって、彼の弁論術論を強化する。——ところで、彼はまず、「法の制定者たち (hoi tithemenoi tous nomous)」は「弱い人間ども (hoi astheneis anthropoi) と多数の間ども」(四八三B) であるとし、かく彼等は弱きものどもであるから、「自分自身のために、自分たちの利益を (to hautois sumpheron) 目あてに、法を制定し、賞めたり、非難したりしている」(四八三C)。かくして、彼において「法は劣等なるもの (phauloterai)」を護るためのものである。

しかるに、彼は「自然 (phusis—天賦・素質と衝動) と法とは、しばしば互に相反するもの」であって、「自然的には (phusei)、すべてのことがより悪いものの方、即ち、不正をされる方 (to adikeisthai) がより恥かしく、法的には (nomoi) 不正をする方 (to adikein) が恥かしい」(四八三A)、また「自然そのものの明らかにするところでは、優者が劣者よりも、そして能力あるものが無能者よりも、より多く所有することが正しいのである (hoti dikaios estin ton ameino ton cheironos pleon echein kai ton dunatoteron ton adinatoterou)。(四八三D) 正しきこと (to dikaios) は、まず、不正をされる方よりも、する方が正しいということであり、つぎに「強者が劣者、弱者を支配し、強者がより多く所有すること (ton kreitō ton hētonos archein kai pleon echein)」である。(四八三C)

しかれば、自然に従っての正義 (to kata phusin to dikaios) とは「優越者が弱者のものを力づくで奪い、優良者が劣者を支配し、すぐれたものが劣っているものより多く所有すること (agēin biai ton kreitō ta tōn hētonōn kai archein ton beltō tōn cheironōn kai pleon echein ton ameino tōn phauloterou)」であり、また「大國が小國に対して侵入を試みるものが自然の正義に適っている (hai megalai poleis epi tas mikras kata to phusei dikaios erchontai)」(四八三E) である。

「何故かといえば、大国は優越して強力(四八八C)(ischuroteron kai beltion)」であり、「優越しているものは、はるかに優良なもの(四八八D)(hoi kreittous beltious polu)」であり、「優越と優良と強力とは同じである(四八八D)(tauton esti to kreittou kai to beltion kai to ischuroteron)」からである。しかれば大衆の法習(四八八D)(nomima=ordinances)というものは、実は、優越者の制定にかかる優越者の法習でなければならぬ。しかるに、「法律上では、——中略——大衆以上に利益を求めることは不正であり、恥かしいことである(四八三C)」といい、彼らはそれを不正行為(四八三D)(adikein auto kaloûsin)であると呼ぶ。これは、すでにのべてきた自然の正義たる——不正をされるよりする方が正しく、強者の弱者支配は正しいという原則に反するものである。しかるに、この自然に反する法を追求し、法の基礎理論を提供しているのは哲学である。しかれば、カルリクレースにおいて、ソクラテースの哲学は排除せらるべきものであり、排除したのであった。かくして彼は、法(二哲学)を排除することによって弁論術を安泰ならしめ、彼の弁論術論を強化する。(三)さらに、彼によれば、優良者(二優越者)とは「すぐれて聰明なもの(四八九E)(hoi pronomoteros)」、即ち「国家の事に対して、どうすればよく治めることが出来るかの聰明さをもち、しかも聰明なものであるばかりでなく、その上、勇敢なもの(四九一B)(andreioi)」であり、考えたことはやり遂げるに足り、そして心の弱さのために、たじろがない人達(四九一B)(mé apokanôsi dia malakian tes psyches)」である。かくては、優良者(二優越者)強者(二聰明なるもの)勇敢なるものが「国家を支配することが相応しい(四九一D)」のである。そして、また、自然の正義に従えば、彼らが「劣れるものよりも多く所有すること」(四九〇A)(pleon echtein tôn phauloteron)がなければならない。

ところで、何故、優者(二強者)強者(二支配者)が、被支配者たる劣者よりも、より多く所有することが正しいのかといえ、それはすでに、カルリクレースがのべた、法の制定者は弱者の利益をまもるためのものである、ということと関連するものであって、結局、弱い人間どもは余計とすることが出来ず、また、彼らは「劣等なもの(phauloteroi)」だから

平等 (to ison) に所有すれば万足^(四八三C)』している。それでいながら、法制上では、多くの人々が、「余計にとること (to pleonekein) は恥かしいことであり、不正なこと^(四八三C)」であるとして、「力があつて余計をとることの出来る人々を恐れさせ、自分たちよりも余計をとることのないようにする^(四八三C)」のである。かくして、法は劣者、弱者の利益を防衛するために人為的につくり出されたものである、——しかるに優良者^(四八四C)と優越者^(四八四C)と強者^(四八四C)と聰明なるもの^(四八四C)と勇敢なるもの^(四八四C)、総じて優者強者が国家の支配者であるならば、彼ののべたことからわかるように、優者強者が劣者弱者より余計もつことは正しい。そして、このことは「人間以外の動物においてのみならず、人間の国家や種族の全体の間において (at holois tais polesei kai tois genesin) も正し^(四八三D)」、——その理由は、「もしかして十分自然の素質に恵まれて人となるものがあつたとすれば、それらすべて (法習となつたもの) をふるい落とし、打破し、脱却し、——中略——すべて自然に反した法を蹂躪することによって——中略——自然の正義 (to tes phuseos dikaiōn) を輝かせることが出来るからである。しかし、このことを為しうるものは、優者強者をおいてない。かくして劣者弱者と優者強者との所有関係は多くのものが、後者に帰すべきものであり、法はまた、ただ劣者弱者の利益を守るために作つた人為的な人間の社会存在の理法である限り、自然の正義を輝かせるためには、この人為的制限を打破し、超越すべきである。まさにそれは、一般に、自然に、人為的法よりも一段と高次のものであるからである。

かくして、カルリクレスにおいて、劣者弱者の社会存在の理法である法は排除され、乗り越えられなければならないのである。——そして、このことが三たび彼をして、ソークラテースに向つて、法を追求し、その基礎理論を提供する哲学を斥けて、もっと広大なものにつかねばならないといわしめるにいたるのである。かくして、彼は哲学を斥けること、つまり、人為的な法を打破し、超越することによって、彼の弁論術を安泰ならしめ、その弁論術論を強化するのである。

以上、カルリクレースは、まず、ソークラテースの非実務的、非実利実益的哲学を排除することによって、つぎは、劣者弱者の利益護持のための法、——それを追求しているものは哲学であるが——その法Ⅱ哲学を排除することによってさらに、彼の優者強者の劣者弱者支配と、前者が後者よりも多く所有することが自然だ、自然の正義だとするところから、——それを否定する人為的な法Ⅱ哲学を打ち破り、乗り越え、自然の正義を輝やかさせねばならないとして、法Ⅱ哲学を排除することによって、弁論術を安泰ならしめ、それと同時に、彼の弁論術論を強化するのである。

Ⅱさらに、彼は、強者弱者は国家の支配者として適当なるものであり、それ故に、彼らが劣者弱者を支配し、彼らよりも多く利益を享受することが、自然であるという主張から、優者強者である支配者が、正しく生きようとすれば彼らの欲望(φῆβυλῖα ἢ ἐπιθυμία)は制御すべきではなく彼らの「欲望を(τὰς ἐπιθυμίας)出来るだけ大きくいまにし、——中略——欲望がどんなに大きくとも、勇敢と智慧とで(ἀνδρείαν καὶ φρονέσιν)これに仕え、そしてそれぞれの場合において、欲望の対象となるものがあれば、これを満足させることの(ἀποπimplanaí)出来るものでなければならぬ」として、支配者の欲望を肯定し、その充足は徳(ἀρετή)でありとする。この彼の主張は、とりもなおさず、支配者のあくなき欲望Ⅱ権力欲(πλεonexia)の衝動の限りなき膨張の肯定であり、それは自然の正義であるとする立場を表明するものである。しかして、このことは、彼をして、支配的な地位につきうる十分な能力を恵まれている人々にとって、節制(σôphrosunê ἢ ἑαυτοῦ τῆς ψυχῆς ἐνέργειαν)自分の心の中の快楽や欲望を支配すること)や正義(dikaïosunê)より恥かしく、悪いものではなく、^(四九二B)即ち、支配者にとって節制や正義は問題にすべきものではないと主張させる。さらに、彼は「ぜいたく(truphê)や放縱(akolasia)や自由(eleutheria)は、もし支えるものⅡ後楯になるものがあるならば(ean epikourian echêi)徳であり、幸福(eudaimonia)である」というにいたる。^(四九二C)しかれば、まさに、彼において、劣者弱者は欲望の充足、即ち彼自身、自分の快楽(hedonê)に満足を与えることが出来ないものである。

それ故、彼らは、「彼ら自身の意気地なさから (dia tén hautón anandrian)、節制や正義を賞讃」し、また「彼らは彼ら自身の無力をかくすために (apokruptomenoi tén hautón adunamian)、恥かしさからこのようなもの(欲望)を非難し、かくして放縱は恥かしいことだというのである」^(四九二A)。しかしそれは、あくまでも欲望の充足、快楽の満足が出来ないことに起因するものであって、口実にすぎないものである。——かくて彼において、支配者のあくなき欲望、権力欲の衝動の限らない膨脹を肯定し、充足させるようにすることが、自然の正義であり、徳であり、幸福であるのである。

ところで、勿論、この彼の論の背後には、弁論術は以上のことを正当づけるものとして働らくものでなければならぬ、ということを含んでいるのである。——そして、このことを含んでいることは、以下、カルリクレースが、「不正をされまいとすれば、不正をされない力を (dunamin) もてばよく」^(五〇九D)、それは「自分が自由において支配者、もしくは独裁者となるか、あるいは現在の政府にくみするものに (tēs huparchous politeias hetairon)」なることでなければならぬ^(五一〇A)、国家において有力であれば、不正をされないものとなり、^(五一〇B)また、弁論術は「裁判所で (ēn tois dikastēriois)、われわれを救う弁論術」^(五一〇C)になることが出来る、——といっていることからわかると思う。かくして、まさに、彼において、弁論術は国家の支配者に即して、その有力が節制とか、正義とかいう劣者弱者の人為的制限(法)を打破して、限りなく支配者の衝動を満足させるように働くこと、それが弁論術の弁論術たる所以である、ということになる。——力 (Macht) は正義 (Recht) であるからである。

かくして、彼は弁論術は力であり、力は正義であるということとを正面に出すことによって、ポーロスの弁論術僭主論をのりこえ、弁論術ならびに、その論を強化徹底する。

Ⅲさらに、このような彼の態度は、彼をして、その結論において、弁論術は、ソークラテース的な意味での「へつ

らふ (kolakēsivonta = kolakensonta) ^(五二B) であつて、いふと極論させるにいたる。

ところで、ソークテラスのいみする「べつらふ」とはいかなるものか、——それは「肉体について (peri sōma) であろうと魂について (peri psuchē) であろうと、また他の何についてであろうと、より善、より悪ということを考えないで、人が快楽をこととすることであり ^(五〇C)」「むしろ快楽を目的とし、観衆が悦ぶことに熱をあげている (pros tēn hēdonēn mallon hōrētai kai to charizesthai tois theatais) ^(五〇C)」ものであり、さらに、それは「国民に悦ばれるように努力し (pros to charizesthai tois politais hormēmenoi)」、そして自分たちの私的な利益のために公けの福利を犠牲にし、丁度子供に対するように民衆と交わり、ただ彼等に悦ばれることだけを試み、結果において、より善くならうと、より悪くならうと、少しも考えないものである ^(五〇E—五〇A)」。

さて、それにしても、彼が以上のような極端な論をするにいたつた理由はどこにあったであらうか。——これは、勿論、支配者ⅡカⅡ正義であるという彼の論と関係するものであるが、——もっと直接的には、彼が「国民の魂が最善になるように心掛けること、つまり、聴衆に愉快であらうが不愉快であらうが、最善を話すのに、敢然と戦う ^(五〇A—B)」ところの弁論術を駆使した弁論家は、テミストクレス (Themistoklēs) やキモン (Kimon) ^(五〇C)、ミルティアデース (Miltiades) ^(五〇D)、ペリクレスであり、これらの人々は「国民として優れた人物 (agathoi politai) ^(五一D)」であつた、といふのに対して、——真向から、ソークテラスが反対論を展開したからである。

ところで、ソークテラスにいわせれば、ペリクレスは、「始めて備銀の制度 (mistophoria) ^(五一E)」を樹てて、アテナ人を怠惰で、卑怯で、おしゃべりで、何にでも金銭を貰いたがるようにしてしまつた ^(五一E)」人物であり、彼は、施政の始めはともかく、晩年には横領者といわれて、死刑に处せられるところであつた「邪惡なもの (ponērou ontos) ^(五一A)」であつた、として、彼を悪い国家の管理人であるときめつける。キモンについても、ソークテラスは、彼は国民

に徹底的にいやがられ、国民が「陶片追放 (ostrakismos) をした (exosthakisán) 人物」であるといい、また、テミ
 ストクレースに対しては、国民が陶片追放した上に、流刑にした人物であり、ミルティアデースは、他の国を攻撃し
 た失敗の責任を国民に問われて、死刑の宣告を受けようとした人物であつたとし、——もし、彼らが優れた人物であ
 ったならば、そのような運命に逢わなかつたであらうと、——カリクレースに反駁する。

けだし、ソークテラースによれば、「真の国家の統治者にして、自分の統治したその国家から不正に亡ぼされると
 いうことは、ありえない (prostatēs gar pleōs oud' an heis pote aikhōs apolitoi hup' autēs tēs poleōs hēs
 (五一九C) prostatei)」ことだからである。

しかもなお、ソークテラースは、徹底して、彼らはすぐれた弁論家ではない、即ち、彼らは本當の弁論術を用い
 ていないものであるとし、もし彼らが真の弁論家であるならば、彼らは「説得したり、強制したりして、国民がより
 善くなる所以のものに赴くように努めて、彼らの欲望を転向し、欲望をほしきままにしない」ように努力している筈
 である。しかるに彼らは、国民の「肉体が飢えれば食物 (sitia) を、喉が渴けば飲食 (pota) を、寒ければ着物
 (himata) や蒲団 (strōmata) や靴 (hupodēmata) やその他肉体が欲しがるものを供給する」といった「下僕の仕
 事」^(五二七D)「下僕的なこと (dalkoyōwōta = diakonēsonta)」^(五二七D)をしてゐるのである。このように彼らは、時と場合によつて
 「人間の肉体を満腹させたり (emphēsantes)」、^(五二七C)「ふとらせたり (pachnantes) して、彼ら (国民) にほめられながら
 彼らの始めからもっている肉までもだいたしにしてしまふ (prosapolōsin)」のである。つまり、彼らは「節制も
 正義もなしに、港灣 (limenōn) や船渠 (neirōn) や城壁 (teichōn) や貢物 (phorōn) やこのようながらくた物
 (toioioutōn phluarion) で国家を一杯」^(五一九A)にして、国家を墮落させてしまつた。かくては、彼らは「悪いことの責任者
 (tous aitious tōn kakōn)」^(五一九A)である。

しかるに君は、彼らをさして国家を偉大にした^(五一八E—五一九A)(megalen tēn polin pepoiēkenai autous) 人物であるという、——このことは、詮じつめてゆけば、下僕のなことを賞讃していることになる。

ところで、カリクレース、君は「国民が出来るだけ善くなるように国家の医師として(hōs iatron)奮闘する世話をすすめるか、それとも下僕として(hōs diakonēsonta)常に彼らの欲望と御機嫌とりに奉仕する世話をすすめるか」どつちか、——ソークテラーは、激しくカリクレースにつめよる。

これに対して、もともとベリクレース等の弁論術を正しいとし、彼らこそ真の弁論家だと主張する立場に立つカリクレースの答は、弁論術及び弁論家は、下僕の仕事をし、へつらいになつてもいい、——と揚言させる。勿論、ここに至るには、ソークテラーの、彼の主張に対する反対への強い反撥のあることも見逃がせない。しかし、以上の揚言、極言は、——要は、彼が、国民を善におくことは第一義ではなく、国民の機嫌をとりむすび、へつらいことが第一であつて、そのために国家を破壊するような主張があつてもよく、まさに、道義や道德的なものは馬鹿々々しいものだという、——彼の非道義、非道德的な本質論から発するものである。

しからば、彼の弁論術は、——ポーロスの、いわゆる弁論術の存在理由は、この術自身にあるのであつて、その内容や道徳はどうでもよく、弁論術は、悪い目的につかわれても一向に差支えないという彼の論を、一段と強化、徹底化したものであるといわなければならない。

三、結 語

以上、ゴルギアース篇における「弁論術」は、(一)まず、ゴルギアースにおいて、専門的な知識がなくても、信じ込ませるために説得出来るもの、つまり、ごまかしの技術、ごまかしの言論の技術であつて、極めて重宝なものである

とする弁論術論から、(二)つぎに、ポーロスの、弁論術の弁論術たる所以のものは、僭主的性格の弁論術論に強化される。(三)さらに、カルリクレースは、弁論術は国民の御機嫌とりの弁論術、即ち下僕の・おべっ・かの弁論術だという弁論術論に強化、徹底化される。

しかも、以上の弁論術の強化、徹底化論は、その強化、徹底化の過程において、(四)まず、ゴルギアースの、弁論術は不正に用いてはならないという道徳的なものから、(五)ポーロスの、弁論術は、僭主的なものとして、独裁的な権力を恣意のままに駆使し、悪々不正を犯すことがあっても幸福であるように、不正を犯しても罰則裁判をのがれ、罰せられないように弁護し、また、不正をする方よりも、される方が悪いのだから、それを悪い目的に用いても一向に差支えないというように、——弁論術を権力的な非道義的、非道徳的なものにし、(六)カルリクレースに至れば、弁論術は、全く支配者＝強者が民衆を支配し、名誉をえ、権力をうるための手段と化し、それは支配者の欲望・権力欲を満足させることが第一義で、正、善はどうでもよく、このことのために使うべきものであり、また、これは国民の御機嫌をとりむすぶ手段として使い、この目的のために、国家を破壊するような言辞を弄しても恥じとすることを要しないものであると、するにいたった。——それは、まさに、道義や道徳的なものはとるに足りないものだという、彼の非道義的、非道徳的な基礎論にもつくものであり、それを端的に表明するものである。——だからこそ、また、彼は、弁論家は下僕的なことに従事すればよく、弁論術はへつらいであっていいと、いい切るのである。

かくして、ゴルギアース篇における「弁論術」論の帰趨は、——ソークラテースの「極悪な人々は権力のあるものの中から出るものである(ek tōn dunamenōn eisi kai hoi sphodra ponēroi gignomenoi anthropoi.)」(五二六A)「完全に不正をやるような大なる権力を持ちながら、正しく生涯を送ることはむずかしいものである(chalepon en m-egalēi exousiai tōn aidikein genomenon dikaios diabolōnai)」(五二六B)「有力なものは多く悪くなるものゆゑ(hoi po-

Illo: kakoí gignontai tôn dunastén.)」という心配を尻目に、また、「弁論術はいつも正義を目指して用うべきである
(*tēs rhētorikēi houtō chrēsteon epí to díkaiōn aei*)」^(五二七C)、「総てのへつらいは、自分に関するものでも、他人
に関するものでも避けなければならない」という、ソークラテスの切言にも耳をかさず、——カリクレースによ
って、——弁論術は、支配者が民衆を支配し、名誉を得、権力を握るために、民衆の御機嫌とりに終始する「へつら
い」に終わっている、——という結論に至るのである。

以上、かえりみて、我々は、まさに、ゴルギアース篇における「弁論術」論は、ゴルギアースからポロースへと強化
され、カリクレースにいたって、弁論家の従事することは、下僕的なこととよく、弁論術はへつらいの論であって
いいという弁論術論に、その帰趨を求めたのを見る。

しかし、このカリクレースの帰趨は、ゴルギアースからポロースへの単なる強化や徹底ではなく、それは、むしろ、これらの人々の弁論術論を徹底化した上で、更に一段と非道義的、非道德的、つまり、下僕の、へつらい的なもの
に露出させ、露骨化させたものであるといえると思う。
(一九六〇・二・二)

主なる参考文献 The Leob Classical Library, Plato V, Gorgias.

John Burnet, Platonis Opera III, Gorgias.

鹿野治助訳「ゴルギアース」